

## 「公子ホムブルク」(クライスト)

十七世紀後半、プロイセンの母胎となるブランデンブルク選帝侯國がスウェーデンと戦ひ合つてゐた頃の話である。選帝侯の甥の公子ホムブルクは勇猛な騎兵隊司令官である一方、夢家の青年でもあつた。或時、戦闘の後、彼は木陰で休んでゐて夢を見る。彼が父とも慕ふ選帝侯に武勲を褒められ、選帝侯の姪の美しい公女ナターリエに月桂冠を被せて貰ふ夢である。爾來、この甘い夢が心から離れず、選帝侯から重要な命令が下された時も心は上の空だつたが、その命令とは、情況を誤認して時期尙早の突撃を行はぬ様、突撃の時機は司令部より派遣する將校が公子に傳へるので、決して自らの判断で突撃してはならぬといふものであつた。

然るに、戦闘となるや、血氣に逸るホムブルクは部下の制止に耳を貸さず、軍の命令よりも己が「心の命令」に従はうとする。しかも選帝侯が砲火の中乗馬もろとも土煙の中に倒れる光景を見て、「怒りと復讐の念に驅られ、さながら暴れ熊」の様になつて敵の堡壘に突撃し、味

方に大勝利を齎したのであつた。

ホムブルクが選帝侯の死を嘆き悲しんでゐると、選帝侯の馬に乗つてゐたのは別人で、選帝侯は無事だつた事が判明する。皆は大喜びする。だが、選帝侯は命令を待たずに突撃したホムブルクの軍律違反に激怒して云ふ。「偶然の手の仲立ち」による勝利、「偶然のむすこ」でしかない勝利なんぞ欲しくはない。今後、この身は何度も戦はねばならぬ。さればこそ軍律の嚴守を望む。それこそが「母として、次々に勝利を生んでくれる力」だからだ。選帝侯は軍法會議の開催を要求し、ホムブルクへの死刑判決を承認する。

ホムブルクは死の恐怖に震へ上り、「墓穴が口を開いて」自分を待受けてゐるといふ想念に取憑かれ、「命が助かりたい」とて取亂し、見るも無殘な爲體をナターリエの前で曝け出す。ナターリエは選帝侯の許に助命嘆願に赴いて叫ぶ、「ああ、人間の偉大さ、人間の名譽とは、いつたい何なのでございませう！」

選帝侯はホムブルクが判決の意味を男らしく了解し得る人物と信じてゐたから、驚いてホムブルクに手紙を書く。自分の「處置を不當と考へ」るなら、その旨通告されたい。さすれば直ちに助命の措置を執らう。ホムブルクは「最後の決定」を自分に委ねてくれた選帝侯の深い信

頼に心打たれ、「氣高い態度」を示す方に「卑劣な人間」として答へる譯には行かぬとて、判決に服する決心をする。ホムブルクの態度に選帝侯は喜んで、彼にもう一度戦闘の指揮を委ねる事にするのであつた。

近代ドイツ文學を代表する一人、ハインリッヒ・フォン・クライストの最後の作品である。クライストは若い頃から「外界の偶然に左右されない確固たる幸福を自己の内面に求めようとする青年」だつたと或る學者が書いてゐる。してみれば、「偶然のむすこ」でしかない勝利を厳しく斥ける選帝侯の言葉は、クライストの生涯の理想の反映とも看做せよう。一方、ホムブルクは「外界の偶然に左右され」て激しく動搖する男である。戦場で「暴れ熊」になつた時もあるさうだし、死の恐怖に惑亂する様になるのも、通りすがりに偶然「墓穴」を見た事に起因する。そして、ペンテシレイアにせよ、ミヒヤエル・コールハースにせよ、激情に突き動かされて破滅するクライストの主人公は多いのである。「心の命令」なんぞといふものが如何に危ふいものか、彼は痛感してゐたに相違ない。この作品をハッピー・エンドで終らせたクライストの意圖はさて置き、作品を完成した一八一一年、彼は自殺で三十四年の生涯を閉じてゐる。

（羽嶋重雄譯、「クライスト名作集」、白水社）